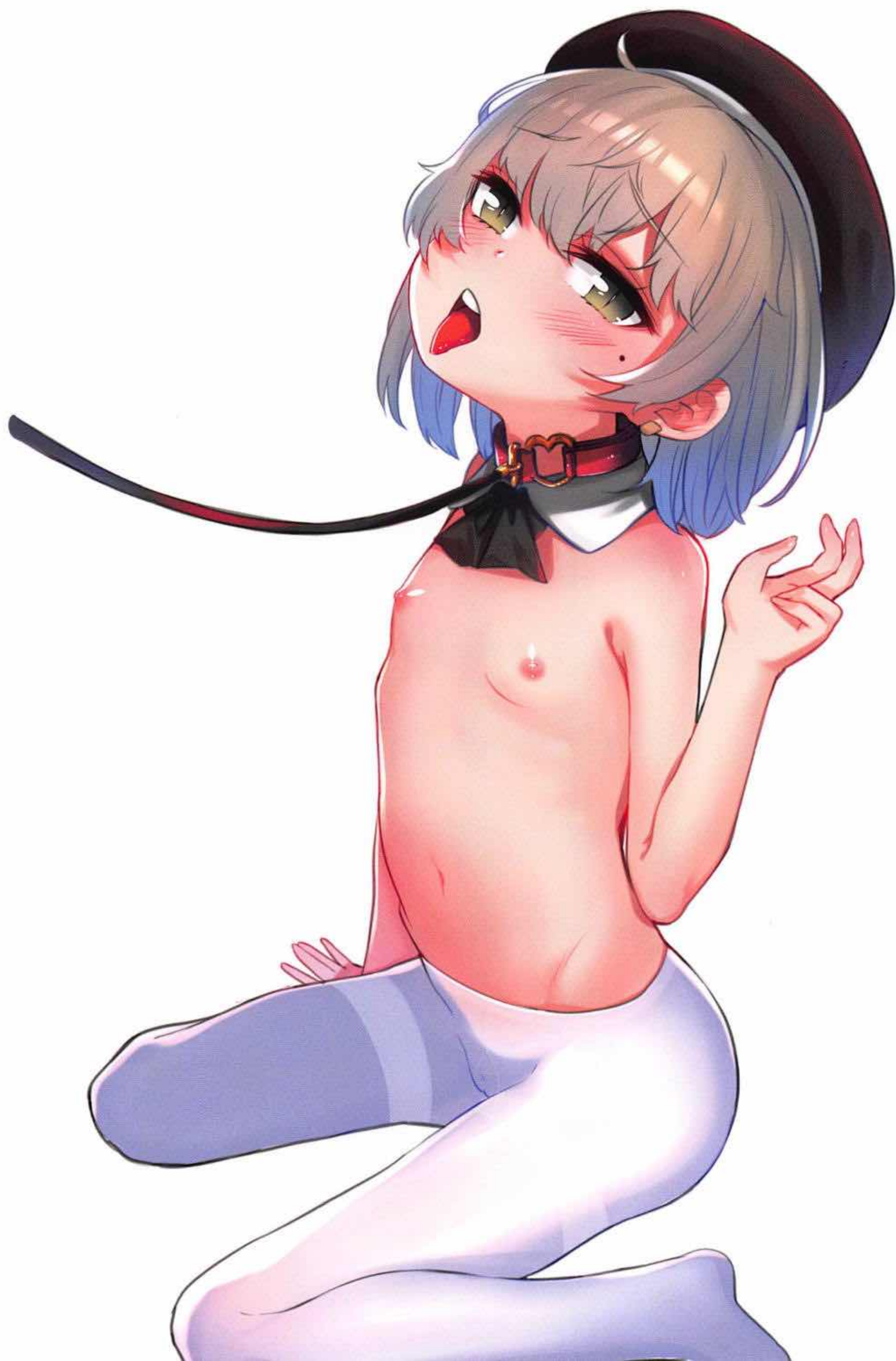


西萩窪に
て...

成人
FOR ADULT ONLY
指定





西荻窪にて……

ある朝
目が覚めたら…

そこに
彼女はいた

いや…
もしかしたらずっと
一緒だったのかもしれない

…昨日までの記憶を
辿ろうとしたけれど
その意味のない行為を
やめて彼女に覆い被さった

服を脱がし無言で
つぐの身体に舌を這わせる

今までもずっと
そうしていたように
しかし新鮮な興奮に任せて

どうしてなのか…
つぐと居るとふつふつと
嗜虐心が沸いてくる…

滅茶苦茶にしてしまいたい
自分にこんなドス黒い感情が
あったなんて…

とてつもない
快感と背徳感の波が
僕に押し寄せる…

小さい身体を抑え込んで
無理やりねじ込み、
好き放題に腰を打ち付ける



ちびっぺん

堪えようとせず
その快感に身を任せ

つぐの中で僕は
射精した

あーっ
あーっ
あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

あーっ

逃さないように抑えつけ
全て膣の奥の奥へ
注ぎ込んでいく

あーっ
あーっ
あーっ

あーっ
あーっ
あーっ

一度でどれだけ
出たのだろうと思うほど
奥から溢れ出してくる...

はあ
はあ

はあ

あーっ
あーっ
あーっ

あーっ...

あーっ

あーっ

これからずっと
つぐと過ごせるんだ...

二日目...

昨日はずっと
犯し続けたので
身体がだるい

なので今日は
逆に奉仕
してもらおう

はぁ

はっ

あれだけ
酷いことを
したというのに

逃げ出すどころか
自分から丁寧に
舐めてくれる

喉を使つての奉仕も
できるようになってきた

のどの奥まで
突いてもまだ全然
入りきらないが...

苦しいことを自身が
望んでいるのだろうか

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

いゝ

不浄の穴に
舌を入れさせ綺麗に
舐め上げるように言う

ぞくぞくと
痺れるような
気持ちよさだ

彼女の歳で男の
肛門を舌で掃除させられた
子などいないだろう……

辛いはずなのに
丁寧に舐めあげてくれる

そのままつぐの
手に射精した

溢さぬよう
絞りとったそれを

飲むように
命令する

パチパチと頭が痺れる程の
強い快感におそわれる

ずずず……と
音を立てて僕の精液を
飲み干していく

さて……次は
何をしようか……

4日目
いや5日目か…?

今日は浣腸器を使って
どれだけ我慢できるか
試している

お
お
お

お

お

お

お

お

ただのお湯でも
数回のお腹に入り
膨れている

ぎ

ぎ
ぎ
ぎ
ぎ

くぐもった声を
聞く度興奮し
未使用の肛門を
容赦なく突き…

何度も
放精していく

ぎ
ぎ
ぎ
ぎ

我慢の限界は
とうに超えている
だろうが許しはしない

お

お

お

お

ぎ
ぎ
ぎ
ぎ

決壊寸前のお腹へ
最後に小便をする
異物でなんとか
栓はできているような状況だ

だめ
おしっこ...

あー...

でしゃ...

抜いたときどんな表情や
声をあげてくれるか
楽しみだ

ポポポポ

ムムムム...

あー...

あー...

ぬほ

あー...

明日は何をしようか...

あー...

数週間は経っただろうか
時間の感覚が曖昧だ

つぐには
僕が寝ている間も
拘束し快楽を
与え続けていた

断続的に絶頂を迎え続け
たまに大きな波がくるのか
拘束された身体が跳ねる

ただ小さなオーガズムばかりで
物足りないのか必死に腰を
動かして快感を得ようとしている

ソファに水たまりができるほど
イキ続けて声も出せず
休むことも出来ずにいた

視覚が遮断され
意識がずっと快感の方へ
向いているのだろう

手伝ってあげようか
感度が高まっているそこを
クリップでつまみ上げる



括りつけた紐を引っ張るたび
電気が流れてるような反応をみせる

タイミングを合わせてやると
全身を痙攣させ
派手にイッてしまったようだ

ギン

ギン
ギン

イッてイッて

イッて

3っ

3っ

3っ

眺めているだけで
射精してしまった

僕の精液で塗れたつぐは
表情は見えないけれど

満たされたように
微笑んだ気がした

強い快楽を
与えれば与えるほど
つぐは美しく輝いて見える



日付を数えるのは
とうに辞めてしまった

今日は近くの公園へと
散歩にきている
ずっと部屋じゃ刺激が足りない

あーあ

その姿を見ていたら
我慢できなくなってしまうので
近くの公衆トイレへ…

小便器を舐めろと言ったら
躊躇していたので
ケツを叩いてお仕置きをした

犬のように歩かせ
首輪でリードを引いてあげる
もちろんおしっこも犬のように

嗚咽を吐きながら
汚い便器を舐めるつぐに
興奮し乱暴に犯した



便器なんだから
主人の小便も飲めるよな？
そういうとすぐに口を開けて
飲む態勢になった

びゅんびゅん

んんん

早く下さいと言うような
つぐの口へ黄色い液を
放出していく

懸命に溢さぬように
喉を鳴らして飲んでいく
いじらしい

ゴク

ゴク

ニムニム

ニんん

飲むものじゃないそれを
嬉しそうに飲下していく

見知らぬ人らが使用した
便器は舐めたくないが
主人の小便は好きのようだ

ぶあ

んんんんん

ご褒美と思っているの
だろうか：結局小便を
全て胃に収めてしまった。

永遠とも思える
時間の中…

僕はつぐと二人きりだ
この世界には
僕達以外いない

他の人間なんていら
ない
僕はつぐだけが
そこに存在すればいい

もし僕たちが
永遠にならないのであれば
この手でつぐを壊して…

このまま
この瞬間のまま…
終わらせてしまいたい

細い首をギリギリと
締め上げていく…

すぐに折れてしまいそうな
華奢な身体に自分の欲望を
ぶつけていく

ぽんぽん
ぽんぽん
ぽんぽん

は…は…は…
は…は…は…

あっ
あっ
あっ

ぽんぽん
ぽんぽん
ぽんぽん

ギュー
ギュー
ギュー

ギュー
ギュー
ギュー

愛おしい…
愛おしくて愛おしくて

いくら想っても彼女は
まだ愛おしい

彼女に被虐を
身体に刻んで
僕のモノにしたい

僕だけのつぐ
世界には僕とつぐだけ
永遠に…

そう…

これからもずっと
永遠に僕達は一緒なんだ

しかし
彼女はなぜだろう

ハッと我に返る
危ない感情に
支配されていた

つぐをみると
大丈夫そうだ

寂しそうに
微笑んでいたんだ…



おは…

いつものように
声をかけようとしたが…

そこには誰もいなかった

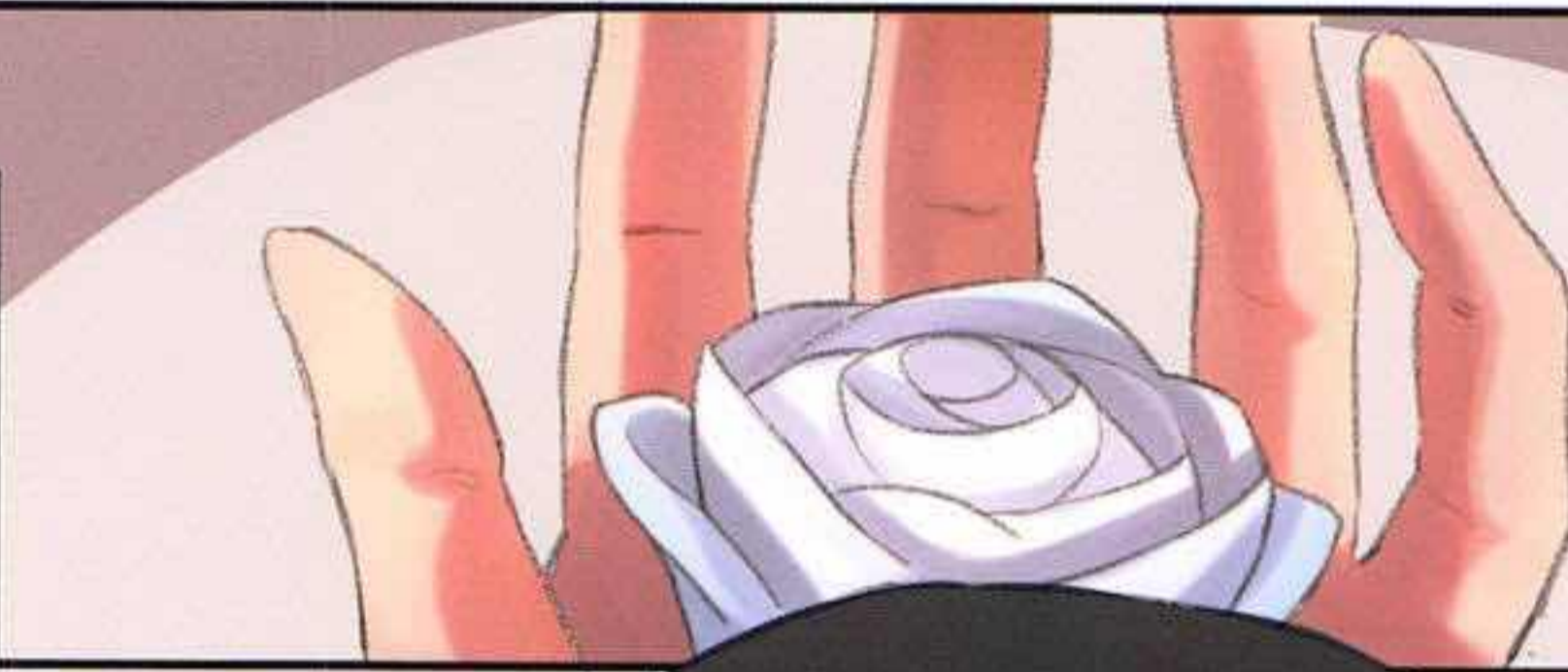
そもそも僕は誰かと
一緒だったのか
それすらもあやふやだ…

長い長い夢を
幸せな夢を僕は
見ていたのかもしれない

忘れてしまったことは
多分…とても
とても大切なことで

それが何かは
わからないけど
心にぼっかりと
穴があいてしまった…

もう二度と僕の心が
満たされることは
ないのだろう







本編に入れられなかったボツえっち



お風呂あがりっくちゃん



あとがき

どもどもホロナミンです。
ギリのギリで間に合うかも…？
みたいな博打をしています。
間に合え！！
つくちゃん本ほんとは8Pくらいのモノクロ本に
しようと思っていたのになぜこんなことに…

制作中はよくエルガーの「愛の挨拶」を聞いてました。
これはエルガーが妻との婚約するときに書いた曲ですね。
国から「ナイト」の称号を贈られたエルガー、
遺言で「ナイト」の人々だけが埋葬される
荣誉ある墓地に入ることを拒み、妻と一緒に
仲良く埋葬されているとのこと。

愛の挨拶…ぼくもつくちゃんに愛の挨拶として、
この本を描いてみました。
僕にナイトの称号を送られたときはナイト墓地には
入れないでつくちゃんと一緒に埋葬してほしい。
これ遺言にしておきます。

ではまた次どこかしらで…

「西荻窪にて…」
発行日■2018/10/14
発行■ホロナミンZ
発行者■ホロナミン
ツイッター■@horonaminz
連絡先■horonamin@gmail.com
印刷■株式会社 栄光

horonaminZ

